

## 二重写しの中国近代女性の肖像

林敏潔著／藤井省三 林敏潔共訳  
 蕭紅評伝  
 空青く水清きところで眠りたい



A5判 320頁  
 東方書店  
 [本体 4,500円 + 税]

上野 千鶴子

中国文学の専門でもない者が、林敏潔さんの著書『蕭紅評伝』の書評を書くことになったのには、訳がある。昨年、東南大学での集中講義のために南京に滞在、現地で南京師範大学で教鞭をとる林さんの知己を得た。著書をたまわり、旅のあいまに読了、おもしろさに引きこまれた。読後感を伝えると、では書評をと頼まれ、うかつに引き受けたが、その後で愕然とした。わたしは蕭紅の作品を、一点も知らないことに気がついたからだ。

あわてて代表作の『呼蘭河の物語(原題：呼蘭河伝)』を含む数点を読んだ。読んで魅了された。評伝を書評するのに、もとの作家の作品を知る必要はないかもしれない。三島由紀夫の評伝を評するのに、三島の全作品を読了しておかなければならないわけではないことと同じである。もし評伝の作者と同

じだけの予備知識が必要とされるなら、評伝の評者を得ることとは難しいだろう。評伝は評伝として、完結した作品である。それだけではない。評伝とは、対象となった作家に仮託して、自らを語る迂遠な表現の形式である……とわたしは信じてきた。だから『蕭紅評伝』は、蕭紅について語る以上に、より多く、林敏潔という書き手について語っているのだ。そう思えば、原著を読まなくてもすむ、と言えばよい。だが、評伝の魅力は、書き手への関心にとどまらず、書かれた作家の魅力を伝えることで、原著へと読み手を誘う力にあるとすれば、本書はそれに成功している。書き手は、自分が魅了されたものへと、読者を誘う。読者は二重の魅了を通じて、二重写しになった、中国近現代の女の人生の影絵を見る思いがするのだ。

蕭紅は一九一一年生まれ、わずか三二歳で夭折した。文壇で

の活躍は一〇年程度にすぎない。従来「抗日文学」の分野で評価されてきたが、文革終熄後の改革開放の波の中で再評価の動きが生まれ「蕭紅ブーム」が起きた。九〇年代にはフェミニズム批評の影響を受けて、「蕭紅ブーム」が再燃した。本書はその流れのなかにあるが、翻訳的な知識としてのフェミニズム批評からも距離を置く。本書がより関心を抱くのは、作品論以上に作家論である。

事実、蕭紅の三二年の生涯を描く著者の筆致は生き生きしている。生まれて間もなく母を喪い、再婚した父と継母とに虐待されて育つ。進学を求めるが得られず、親の決めた結婚にあらがって家出して妊娠した後、男に棄てられる。困窮の中で作家の蕭軍と出会い、結婚するが、蕭軍のたび重なる裏切りに遭う。その後、再婚した相手とのあいだにも、安らぎは得られない。蕭紅の育った家も、蕭軍とつくった家庭も、いずれも中国東北地方の家父長制から逃れることはできなかった。蕭紅の父は暴力を振るい家族を従わせる「専制君主」であり、夫の蕭軍もまた「男性至上主義の亭主関白」、「東北男児の気風と、愛情に対する不誠実さ」【本書一七二】と併せ持っていた。蕭紅の二度にわたる結婚の失敗を、著者は「実は、二人（の夫）は妻を求めていただけで、才女を求めていたわけではなかった」【本書一二五】と書く。子ども時代の彼女を虐待した継母も、

家父長制の犠牲者であり、また代理人でもあった。「母は父に仕えることを終生の職業としており」ながら、同時に「抑圧側の役割を果たした」【本書一六九】。母の「二重の役割」とは「被害者であり、また加害者でもあるのだ」【本書一六九】。

蕭紅の作品をほぼ自伝的な作品として読む林さんの「評伝」には、著者自身の人生が投影されているように見える。

「男性に気に入られるために、女性は男性の客体とならねばならず、このため女性は自主権を放棄し、自由を放棄せねばならないのだ。女性は自由を失うほどに、自らの主宰者たりにえなくなる」【本書一七三】といった表現には、思いがけずつよい著者の肉声が響く感がある。

そしてこの時代における「妻」とは、自由を失って夫に仕える無力な存在になることと同義だった。

「人の意識がなおも伝統社会文化の束縛から完全に脱していないときには、いわゆる覚醒も精神的夭折の促進剤となるのだ。それは、男性であろうと女性であろうと、社会がすでに改革されても、自らの心理に対する伝統的因襲による束縛を排除し脱却することは、ただちにできないからである」【本書一九〇】。蕭紅の言葉を借りて語られたこの感慨は、著者自身のものではないだろうか。

蕭紅晩年の作、一九四一年の『小城三月』が五・四新文明

の息吹に触れながら、「新文明が女性に送った最初の贈り物とは新生ではなく、さらに高次元の困惑と新たな絶望であった」「本書一七八」と、主人公の女性の困惑と絶望が描かれる。蕭紅の一生を、著者は「女性解放に対する初期の認識があり、その後は苦悶の境地へと落ち込み、最後には絶望状態の渦へと導かれて」「本書一八四」いるとまとめる。「夢から覚めると行くべき道がない」、この時代に創られた喪失感を抱いた「ノラ」となった」「本書一八九」と書く著者自身の人生に、読者は踏み込んでみたくなる。

林敏潔さんは一九八七年に日本留学して以来、二〇一一年に母国に職を得るまで、長く日本の各大学で奉職した一種のディアスポラ（故郷喪失者）である。蕭紅の人生を、「温かみと愛を求め」て「常に「逃走」状態」「本書一五六」だった、と書くとき、著者の人生もまた、重ね合わされているに違いない。そう解釈する誘惑から逃れられないほど、この評伝には、蕭紅への共感と同一化とが満ちあふれている。

本書には、著者による「蕭紅生誕一〇〇周年に捧ぐ」序詩、「世紀の孤独」が掲げられている。

「何世紀もの孤独を、／なぜあなたが引き受けるのか？／（中略）／何世紀もの憤怒を、／なぜあなたが聞き取るのか？／（中略）／私は：／あなたが女のためにつく永久の

溜め息を聞き、／…あなたが目覚めて失った秘密を探し出す。（中略）／あてもなく漂うあなたの命の舟は、／今も岸から遠く離れており、／（中略）／あなたの彷徨える寂しき魂は、／いつ帰郷を果たせるのやら。」「本書一—三」久しく異文化に暮らした者は、自文化に戻っても、なにがしか異邦人のままだ。林さんの「帰郷」は果たせたのだろうか。

「あとがき」で「長年海外を漂泊して」「本書二九九」いた、と書く著者は、慣習に縛られない「自由」を得たかもしれないが、その「自由」の代償をもまたしたたかに支払ったに違いないのだ。

だが蕭紅評伝を、林敏潔伝として読む越権は、ここらで控えておこう。本書の魅力は、力のこもった内容もさることながら、中国の古典の教養に裏付けられた著者の文体と比喩の卓拔さにもある。蕭紅は魯迅が高く評価した同時代の女性作家だった。その魯迅亡き後、追悼のために書かれた「魯迅先生の思い出（原題：回憶魯迅先生）」を評して「魯迅生前に献げられた永遠に枯れない花輪」であるとか「情念の赤い糸で真珠のごとき題材をつないで明晰な画を織り上げた」「本書二〇九—二一〇」などの表現は、日本人には書けない比喩である。どうしても原文を読みたくなくて、訳者の藤井省三さんの「厚意で入手、一読、驚嘆した。「思ひ出」と言いながら、過去形の追悼文ではなく、思

慕と敬愛にあふれた現在進行形の叙情詩、魯迅とのその時々  
の場面が手にとるように現前する文章の表現力に圧倒された。

ちなみに魯迅が評価したという『呼蘭河伝』は、蕭紅の故郷、  
東北地方の小城市をそのまま主人公にしたような叙事詩であ  
り、同時に祖父の慈愛のもとにあつた子ども時代の至福を再現  
する叙情詩でもある。東北地方の呼蘭河は、酷寒の地である。

冬には大地が凍み割れ、河が凍結する。さらに寒くなる  
と、河の水がピンピンと裂ける。冬は、ひとの耳たぶを  
もぎとる、…ひとの鼻の頭をくずす、…ひとの手や足を  
裂く〔呼蘭河の物語二三四〕。

その地を舞台に、貧困と無知、差別と残酷、暴力と支配、  
因襲と頑迷、諦念と狡猾とが、あたかも寓話のように淡々と  
描かれる。人は不幸や不条理を経験し、反抗も反逆もせず、  
ただそれに耐えるのみである。他人の不運や失敗は、物見高  
い隣人たちの一時の慰みものになり、そしてすぐに忘れられ  
る。『阿Q正伝』の作者が評価するのも故なしとしない。

かれらは母親の腹から出て以来、これといった希望を  
持ったこともなく、腹いっぱい食い、暖かい着物を着る  
ことだけしか考えたことがない。しかし、腹いっぱい食  
うことも、暖かい着物を着ることもできない。

逆境には、じっと耐えていくだけだ。

幸運には、一生めぐりあうことがない〔呼蘭河の物語二七六〕。  
だが、『阿Q』と違うのは、女が経験する不条理が、これ  
でもか、と描かれていることだ。阿Qもまた、もし女を「モ  
ノにする」ことができれば、抑圧者に転じるに違いない。な  
ぜなら阿Qも女を支配する男のひとりであり、「あの世でも  
やはり男尊女卑」だから。被害者は自分より弱者に対しては  
加害者になる。そして女が女の虐待の代理人になることも、  
告発口調を交えることなしに描かれる。

時間を超越したような寓話に、語り手の「私」が叙情詩の  
ように織り込まれるとき、その文体に本書の著者もまた影響  
を受けただろうことは想像に難くない。くり返すが、評伝と  
は、他人の言葉を借りて自分自身を語る、迂遠な表現の形式  
だからである。

最後に、中国語を理解しない私のような読者にも、原著の  
文体の味わいを伝える達意の翻訳を届けてくれた藤井さんの  
貢献を、多としたい。

#### 【参考文献】

蕭紅／立間祥介訳『呼蘭河の物語』（『中国の革命と文学』5）所収、  
平凡社、一九七二年

（うえの・ちづこ 東京大学名誉教授）